

# 大岡川水系河川整備基本方針

平成 20 年 9 月

神 奈 川 県

# 大岡川水系河川整備基本方針

## 目 次

1 . 河川の総合的な保全と利用に関する基本方針 .....	1
( 1 ) 流域及び河川の概要 .....	1
( 2 ) 河川の総合的な保全と利用に関する基本方針 .....	4
2 . 河川の整備の基本となるべき事項 .....	5
( 1 ) 基本高水並びにその河道及び洪水調節施設への配分に関する事項 .....	5
( 2 ) 主要な地点における計画高水流量に関する事項 .....	5
( 3 ) 主要な地点における計画高水位及び計画横断形に係る川幅に関する事項 .....	6
( 4 ) 主要な地点における流水の正常な機能を維持するため必要な流量に 関する事項 .....	6
( 参考図 )	
大岡川流域概要図 .....	巻末

# 1. 河川の総合的な保全と利用に関する基本方針

## (1) 流域及び河川の概要

大岡川は、横浜市内の中でも豊かな自然の残されている磯子区いそごの円海山えんかいざん(標高 153m)の氷取沢ひとりざわにその源を發し、丘陵地帯に挟まれた谷を下り上大岡かみおおおかで左支川の日野川ひのを合わせた後に、平地部をゆるやかに流下し横浜市南区山王町みなみさんのうちょうのお三さんの宮付近で中村川なかむらを分派し、横浜市中区ながの JR 桜木町さくらぎちょう駅付近で横浜港に注いでいる。お三の宮付近で大岡川から分派した中村川はすぐに堀割川ほりわりを分派した後に、大岡川の南側を大岡川とほぼ平行に横浜の中心市街地を挟む形で流れ、西の橋付近で堀川ほりと名前を変え、中区の山下町やましたちようで横浜港に注いでいる。幹川流路延長は約 22.7km、流域面積は約 35.6km<sup>2</sup>の二級河川である。

その流域は、南北に長い形状で、横浜市西区にし、中区、南区、港南区こうなん、保土ヶ谷区ほどがや、磯子区いそご、金沢区かなざわ、栄区さかえの 8 区にまたがっており、南部では主に住宅地、北部では横浜の中心市街地として利用されている。地域にとって大岡川は住民の身近な河川であると共に、横浜の中心市街地におけるシンボリックな意味合いを持ち、石積み形状の護岸やかつての荷揚場等、港町横浜の発展を支えた運河の面影が残る川である。

大岡川流域の地形は、源流より日野川合流点付近までが丘陵となっており、それより下流は平地となっている。地質は、丘陵部は富士山噴火の堆積物からなる関東ローム層が地表を覆い、その下には洪積細砂が堆積しており、平地部は、泥、砂及び礫からなる沖積層で構成されている。流域の気候は、太平洋型気候であり、平均年間降水量は約 1,600mm (横浜地方気象台) である。

お三の宮から下流の大岡川と中村川に囲まれた釣鐘状の区域は、万治 2 年 (1659 年)、江戸の木材・石材商、吉田勘兵衛よしだかんべゑによって、新田開発のために埋め立てられるまでは州乾湊しゅうかんみなととよばれる入り江で、大岡川はこの入り江に流入する河川であった。また、支川中村川の末流である堀川は横浜開港の翌年、万延元年 (1860 年) に、支川堀割川は明治 5 年 (1872 年) に、それぞれ通船の便等の理由から開削された河川である。このように、お三の宮より下流の大岡川、中村川、堀川、堀割川は、埋め立てや開削により比較的新しい時代に造られた河川である。

明治から昭和初期にかけて、お三の宮の下流部の大岡川、中村川、堀川、堀割川は、昭和 40 年代に埋め立てられた新吉田川しんよしだ、派大岡川は等と共に、舟運として頻繁に利用されていた。現在でも大岡川沿いに材木問屋や倉庫が見られるのはその名残である。

大正 12 年の関東大震災では横浜市内も大きな被害を受け、大岡川水系の護岸、橋梁はほとんど壊滅状態となった。これらの被災の復興にあたって、大岡川は国の機関である帝都復興院<sup>ていとふっこういん</sup>が行い、中村川、堀川、堀割川は横浜市の復興事業として行われた。この復興事業でほぼ垂直な石積み形状の護岸として施工された。現在の大岡川の原形はこの復興時に形づくられたもので、いまでも護岸や橋梁等、当時の姿を見ることができる。

その後、昭和 30 年代後半から首都高速道路が建設されるようになると、狩場線<sup>かりば</sup>の高架が中村川のほぼ全川に渡り川の上空を覆い、河川上空の空間が地域の交通の幹線として利用されることとなった。この反面、河川の環境は大きく損なわれた。

大岡川下流部や中村川の沿川は、戦後、横浜の中心部として都市化が進み地域の重要な拠点となっている。沿川には開港記念会館など明治期の港情緒あふれる建造物や、イセザキモール、外国情緒のある元町<sup>もとまち</sup>商店街や中華街、港の見える丘公園、外国人墓地等が位置しており、これらは地域の重要な観光資源となっている。また近年は、大岡川の河口部の造船所跡地等が、みなとみらい 21 地区となり、ランドマークタワー、横浜美術館等、観光・商業・文化施設の整備が進んでいる。一方で、プレジャーボート等の不法係留船が堀割川等で顕在化しているため、重点的撤去区域に指定し対策を進めている。

大岡川流域の治水対策は、昭和 30 年代後半の JR 根岸線<sup>ねぎし</sup>の延伸等により、大岡川上流域や日野川流域の宅地開発が急速に進み、その結果、流域の保水機能の低下等により流出量の増大を引き起こし、昭和 36 年 6 月、昭和 41 年 6 月等、洪水被害が多発するようになったことに始まる。特に昭和 36 年の豪雨の際は、浸水面積約 300ha、全壊流失 1 戸、床上浸水 2,942 戸、床下浸水 3,812 戸という甚大な被害を受けた。これに対し、上流部では災害復旧助成事業により河道整備が行われたが、中下流域の河道の拡幅を行うことは市街化の進展状況等から困難な状況であった。そこで大岡川上流域ならびに日野川からの洪水を全量カットし、根岸湾に流す全体延長約 3.6km の大岡川分水路を昭和 44 年に計画し、昭和 56 年に完成している。大岡川分水路の完成により、その後は大きな洪水被害は発生していない。

平成 9 年には大岡川の工事実施基本計画を策定し、現在はこの計画を基に、お三の宮基準地点の基本高水流量を  $480\text{m}^3/\text{s}$  とし、このうち上流における分水路により  $200\text{m}^3/\text{s}$  を調節し、計画高水流量を  $280\text{m}^3/\text{s}$  とする治水対策が定められている。

河川水の利用については、江戸時代には大岡川沿川の谷地には多くの水田が存在したが、現在水田はなく、かんがい用水としての利用は行われていない。また、昭和 40 年代には、中流部

に横浜の名産品であるスカーフ等の繊維製品の捺染工場が多数立地し、洗浄用として河川水を利用していましたが、上流域の人口の集中による水質の悪化とともに河川水を利用できなくなり、昭和 50 年代後半以降、水道用水、工業用水としての利用も行われていない。

流域の環境に関しては、昭和 40 年代の上流域の急速な市街化、中流域の工場等により水質が悪化した。その後、下水道の整備が進み、横浜市の下水道普及率は平成 17 年度末時点で 99.7% に達している。この結果、水質の改善が進み魚類などが生息できる水質に回復し、平成 12 年度には、水質の環境基準の類型指定が E 類型（BOD10mg/ℓ以下）から B 類型（BOD3mg/ℓ以下）に変更されるまでに至った。

大岡川に生息する生物については、河口付近より上流 3.8km の<sup>まいた</sup>蒔田橋付近までは感潮区間であり、植生は乏しく、周縁性の魚類であるマハゼ、ボラ等が生息する程度である。感潮区間より上流では、部分的に砂州が形成され、オギ、オオイヌタデ、ミゾソバ等の群落、コイ、アブラハヤ、ドジョウ等の魚類、カルガモ、サギ類等の鳥類が見られる箇所があり、近年では、河川環境の良い指標といわれているカワセミも確認されている。また、源流域は、近郊緑地保全区域であり、アブラハヤ、シマドジョウ、ヌカエビ、カワニナ等の魚介類等のほかゲンジボタルも確認されている。

河川の利用については、大岡川の河口から中流域にかけて、昭和 50 年代から川沿いにプロムナードが整備され、川の散策をする人々が多く見られる。また、プロムナード沿いの桜並木は横浜の名所となっており、桜の季節には、地元主催による大岡川桜まつりが毎年開かれ、この行事には沿川住民のほか近隣からも数多くの人々が訪れる等盛況である。また、下流部では地元高校のカヌー練習に利用されているほか、有志の企画によるカヌーフェスティバルが毎年行われている。この他にも、小学校の総合的な学習の時間や川遊びに利用されたり、地元町内会や商店街の有志による清掃等が行われている。このように、今日においても、地域住民の川への関心は高く、川との関わりも多い。

## (2) 河川の総合的な保全と利用に関する基本方針

河川整備の現状、水害発生の状況、河川利用の現状、流域の歴史・文化並びに河川環境の保全を考慮し、また、関連地域の社会・経済情勢の発展に対応するよう関連する既存計画等との調整を行い、段階的な整備を進めるにあたっての目標を明確にして、河川の総合的な保全と利用を図る。

災害の発生の防止又は軽減に関しては、沿川地域を洪水から防御するため、上流部の大岡川分水路により洪水の低減を図り、河道改修等により、概ね100年に1回発生する降雨による洪水を安全に流下させる。また、高潮対策を実施するとともに、整備途上段階あるいは計画規模を上回る洪水が発生し氾濫した場合においても、水防管理団体等と連携を図りながら、被害軽減対策を進めていく。

さらに、関係機関や地域住民と連携して、災害情報伝達体制及び警戒避難体制の整備等水防体制の強化を図り、また、水防危険箇所やハザードマップ等の河川情報の提供を行う等、総合的な被害軽減対策を推進する。

河川環境の整備と保全に関しては、下流部においては大岡川河川再生計画等の関連計画との整合を図り、河川が都市域での貴重な自然環境ならびにオープンスペースであることを踏まえ、地域の歴史・文化を考慮し、生活と密接に結びついた河川環境の整備と保全に努める。また、中・上流部においては、河道が過去の改修により単調な形状となっている現状を踏まえ、過去の河川の姿や現在の生物の生息・生育・繁殖状況を把握したうえで、良好な水質を活かし、自然環境の保全と人と川のふれあいの場となるよう親水性に配慮した河道や護岸の整備に努める。

河川の維持管理に関しては、災害の発生の防止、河川の適正な利用、河川環境の整備と保全の観点から、河川の有する多面的機能を十分に発揮させるよう地域住民や関係機関等と連携しながら適切に行うものとする。また、下流部において護岸等を修復する際には、河川管理施設としての機能を考慮した上で歴史的景観を損なわないよう配慮し、あわせて不法係留船の対策に努める。

大岡川の川づくりは、流域の歴史・文化を踏まえ、魅力的で活力あふれる地域づくりの軸となる大岡川とするため、沿川の関係機関が立案する地域計画等との連携・調整を図りつつ、地域住民や関係機関等との協働による河川整備の推進に努める。また、河川に関する情報を流域住民に幅広く提供することにより、河川と流域住民との連携を積極的に図り、河川愛護思想の啓発と定着、NPOや地域住民の参加による川づくりの推進に努める。

## 2. 河川の整備の基本となるべき事項

### (1) 基本高水並びにその河道及び洪水調節施設への配分に関する事項

基本高水は、横浜地方気象台の降雨について検討した結果、そのピーク流量を基準地点お三の宮において  $480\text{m}^3/\text{s}$  とし、このうち洪水調節施設（大岡川分水路）により  $200\text{m}^3/\text{s}$  を調節して、河道への配分流量を  $280\text{m}^3/\text{s}$  とする。

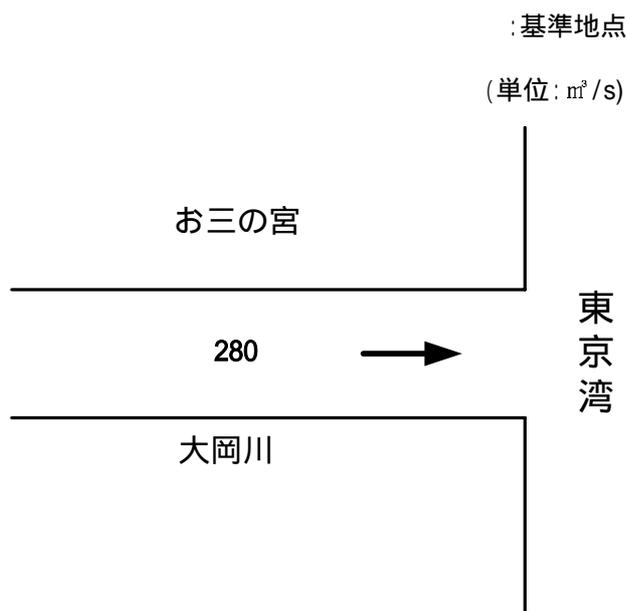
基本高水のピーク流量等一覧表

(単位： $\text{m}^3/\text{s}$ )

河川名	基準地点	基本高水のピーク流量	洪水調節施設による調節流量	河道への配分流量
大岡川	お三の宮	480	200	280

### (2) 主要な地点における計画高水流量に関する事項

計画高水流量は、基準地点であるお三の宮地点において  $280\text{m}^3/\text{s}$  とする。



計画高水流量図

### (3) 主要な地点における計画高水位及び計画横断形に係る川幅に関する事項

本水系の主要な地点における計画高水位及び計画横断形に係る概ねの川幅は、次表のとおりとする。

主要な地点における計画高水位と川幅一覧表

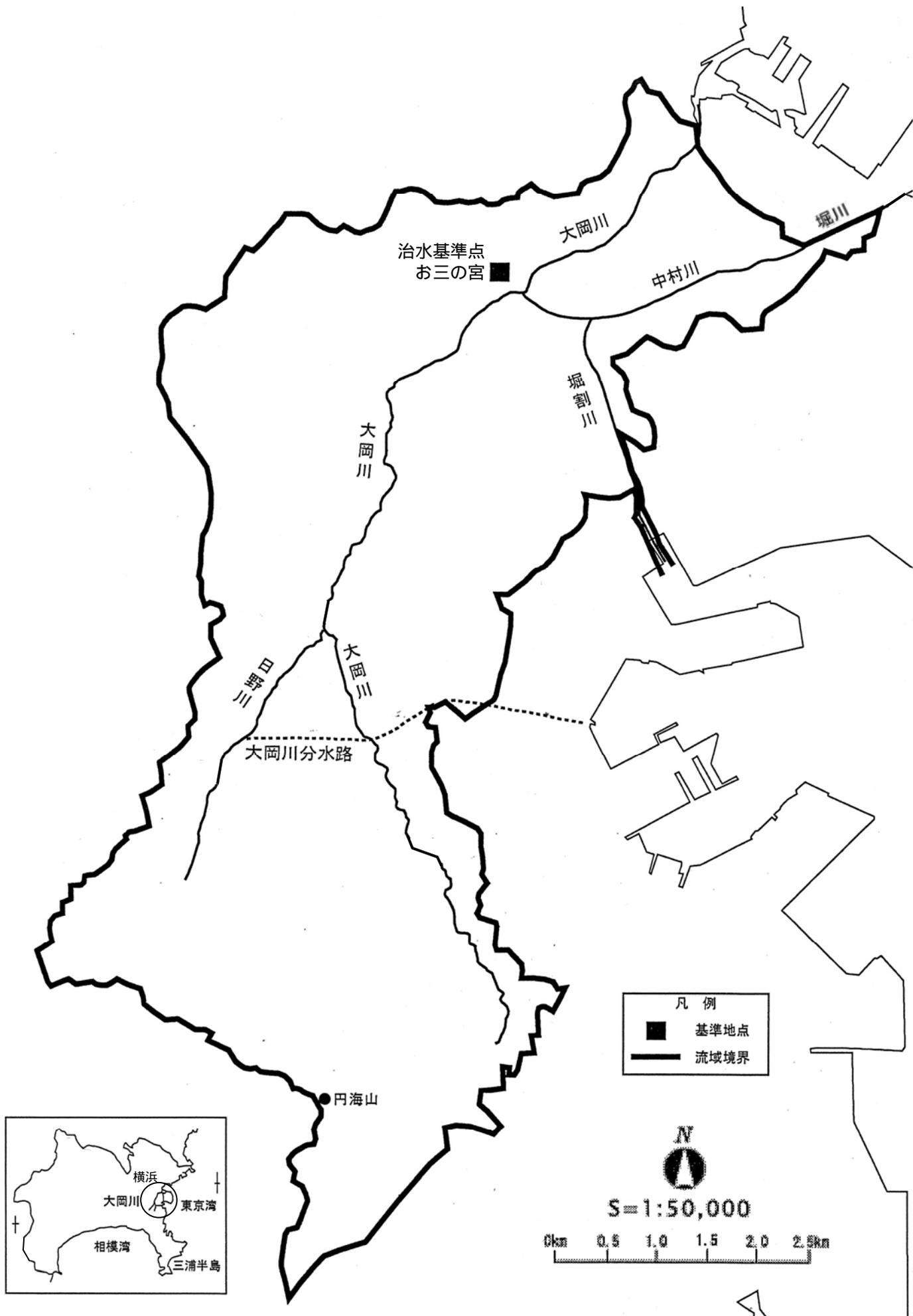
河川名	地点名	河口からの距離 (km)	計画高水位 T.P. (m)	川幅 (m)
大岡川	お三の宮	2.9	+1.8 (+2.5)	23

(注) T.P. : 東京湾中等潮位 ( )内は高潮時

### (4) 主要な地点における流水の正常な機能を維持するため必要な流量に関する事項

現在、大岡川水系に水利権は設定されていない。

流水の正常な機能を維持するために必要な流量は、今後河川の流況等の状況把握を行い、さらに検討を行ったうえで設定するものとする。



大岡川流域概要図